

特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議 石垣・埋蔵文化財部会(第 52 回)

日時：令和 4 年 11 月 18 日 (金) 14:00～16:00

場所：名古屋能楽堂 会議室

会 議 次 第

1 開会

2 あいさつ

3 議事

(1) 不明門北土橋石垣根石発掘調査について <資料 1>

(2) 天守台穴蔵石垣試掘追加調査等の調査成果について <資料 2>

4 報告

(1) 本丸搦手馬出周辺石垣の修復について <資料 3>

(2) 西之丸蔵跡追加調査について <資料 4>

5 閉会

特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議 石垣・埋蔵文化財部会（第52回）

出席者名簿

日時：令和4年11月18日（金）14:00～16:00

場所：名古屋能楽堂 会議室

■構成員

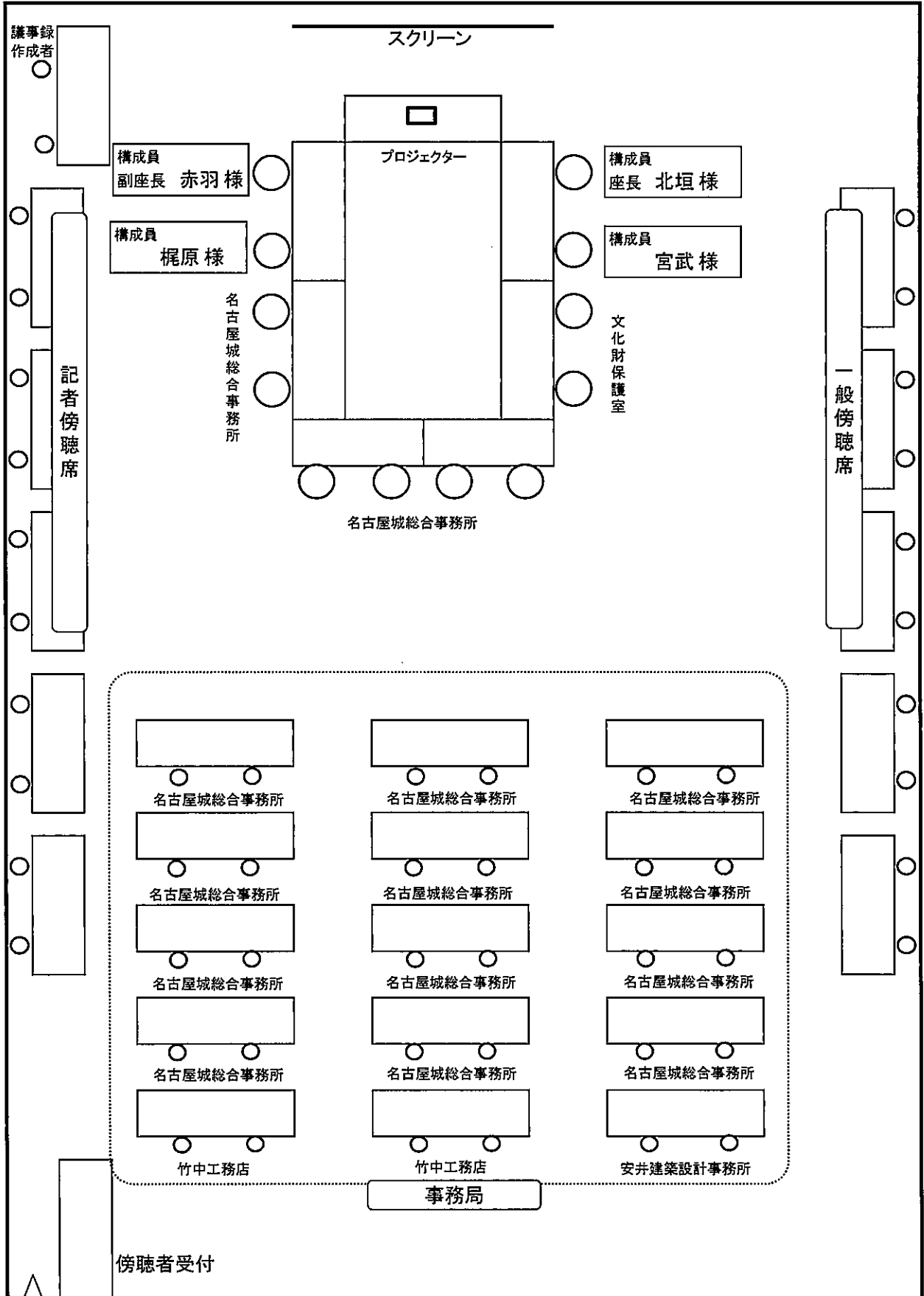
（敬称略）

氏名	所属	備考
北垣 聡一郎	石川県金沢城調査研究所名誉所長	座長
赤羽 一郎	前名古屋市文化財調査委員会委員長・ 元愛知淑徳大学非常勤講師	副座長
宮武 正登	佐賀大学教授	
梶原 義実	名古屋大学大学院教授	

第52回特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議石垣・埋蔵文化財部会

座席表

令和4年11月18日(金)
14:00～16:00
名古屋能楽堂 会議室



不明門北土橋石垣根石発掘調査について

●調査の概要

- ・不明門北土橋石垣の根石の状況等を確認し、その安定状況を確認するため、発掘調査を実施する（別添図参照）。

●調査の前提

- ・令和4年3月24日開催の第48回石垣・埋蔵文化財部会において、現天守閣解体に係る現状変更申請に対する指摘事項への回答について報告した際に、鵜の首（小天守西）の水堀側石垣について、根石周辺の調査を実施して、安定性を確認する必要があるとの指摘を受け、指導を頂き、発掘調査を計画した。不明門北土橋についても同様に根石周辺の調査を実施する必要があると認識している。
- ・石垣面の現状を考慮すると、濃尾地震後に積み直されている土橋西側面の調査が必要と判断される。
- ・過去に実施したレーダー探査の結果からは、根石付近については情報が得られなかった。
- ・不明門北土橋は、来城者の主要な見学動線であり、その安全性確保のためには、石垣面の状況を適切に把握する必要がある。

●調査の目的

- ・不明門北土橋石垣の安定性の検討材料とするため、根石前面の堀底の土層堆積状況等、遺構の残存状況を調べ、石垣の地下部分の現況を把握する。

●調査区の設定

- ・根石付近の地業等の痕跡も確認できるよう南北4m×東西3m（12㎡）の調査区を土橋の西側に1か所設定する。なお、石垣面への影響を考慮し、実際の掘削範囲は、調査区の中で必要最小限とする。
- ・調査区は、調査範囲内に石垣面・内堀底面を対象としたレーダー探査の測線を含むように設定する。

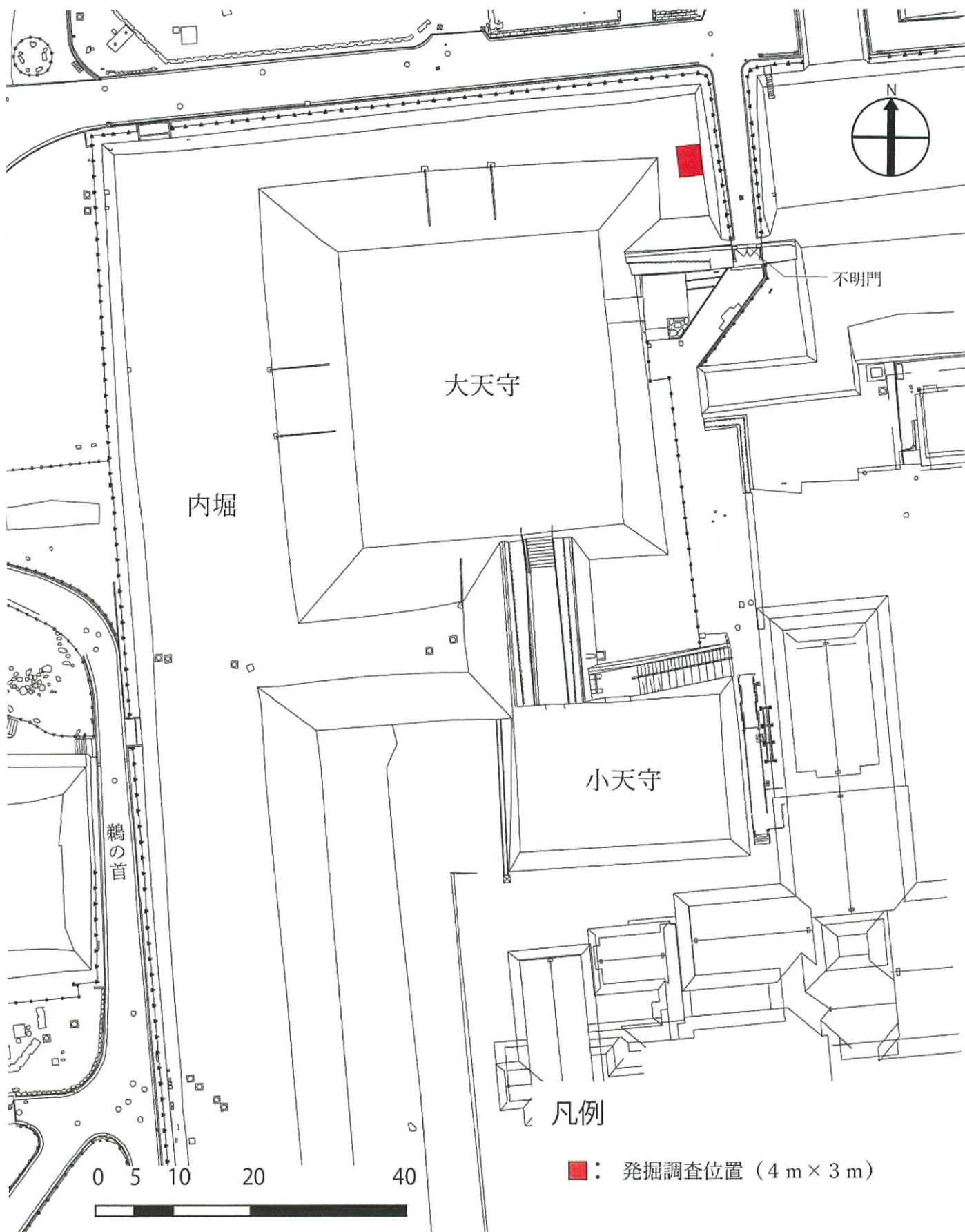
●掘削の方法

- ・人力掘削を基本とする。重機による掘削を行う場合は、表土の掘削に限定して使用する。
- ・層序を確認しつつ掘り下げ、江戸時代の遺構面まで掘削を行う。なお、江戸時代の包含層以下の掘削については、掘削範囲、掘削深等について慎重に判断し、最小限の範囲とする。

●埋め戻しの方法

- ・調査終了後は、遺構面を山砂（約 5cm）で保護した後、内堀内での調査と同様に、以下の方針で埋め戻す。
- ・石垣際については、割栗石を組み叩き込む。また、割栗石の隙間には、掘削土を充填する。
- ・埋め戻しは、掘削土により行い、適切に転圧する。
- ・なお、割栗石の隙間の充填及び埋め戻しには、必要に応じて改良土（掘削土に消石灰を重量比 2%添加したもの）を用いる。

不明門北土橋石垣根石発掘調査 調査予定位置図 (案)



1 天守台穴蔵石垣および橋台試掘調査成果について

(1) 調査の概要

天守台穴蔵石垣周辺における近世遺構の状況を確認するため、図1のとおり9か所トレンチを設定した。昨年度は厚いコンクリートに覆われ調査が困難であった⑥調査区を除く①～⑤、⑦、⑧調査区の調査を行った。

今年度は大天守①調査区の追加調査及び橋台の⑨調査区の調査を行った。

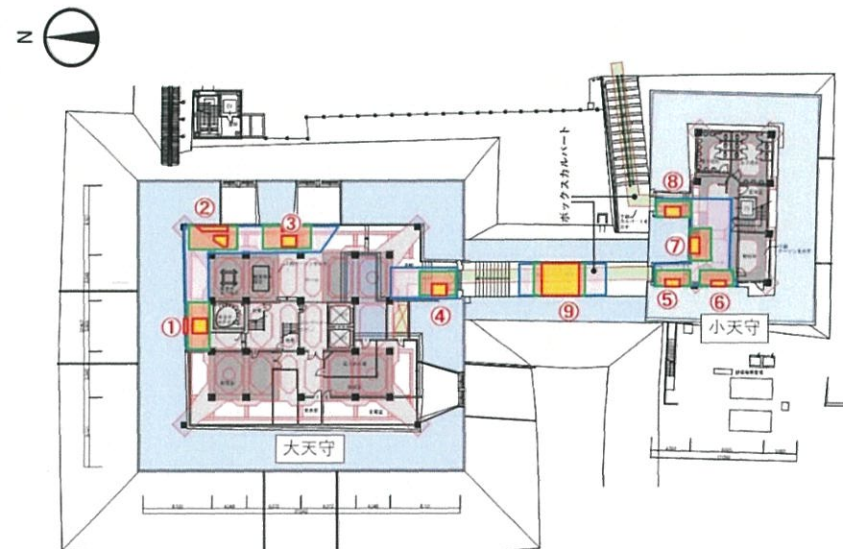


図 1 穴蔵試掘調査箇所位置

(2) 調査結果

(I) 天守台穴蔵石垣(①調査区)

ア 調査の概要

①調査区では、令和3年度に試掘調査を実施した。調査成果としては、現代の攪乱土直下に近世盛土を確認したほか、調査区北壁付近で石列(図2の②～④)を確認した。しかしながら、当初調査区の範囲では、その性格等を十分に把握できなかった。今年度は調査区東西における石列の残存状況、石列上の築石の時期を確認するために調査区を東西それぞれ拡張し調査を行った。

イ 調査成果

(a)調査区拡張部における石列の残存状況

調査区両側では西へ30cm(石垣前面のみ50cm)拡張したところ、石列の延長線上において幅(東西)約50cm、控え(南北)20cm以上の石材(図2の①)を検出した。調査区東側でも東へ30cm拡張したところ、同じく石列の延長線上において幅20cm以上(東西)、控え(南北)約45cmの石材(図2の⑤)を検出した。

これらの石材は、昨年度検出した石列石材と並ぶように設置されていること、検出レベルも大きく変わらないこと、石材前面には既出の石列同様、石列掘り方に充填したとみられる白色粒混じりの土が確認されたことから、昨年度検出した石列の一部と考える。

(b) 石列上の築石の時期

穴蔵石垣の状況を確認するため石垣に貼りついていたモルタルを除去したところ、築石の下部に小礫を含む砂層の堆積が確認された。土層の堆積状況から、砂層は現天守閣再建時の工事土であるため、砂層上の石垣は現代に積み替えられたものとする(図3白線部)。この範囲より東側については石垣下部の堆積状況が不明であるが、築石の据え方等から戦後に積み替えられた可能性がある(図3赤線部)。図3点線部については戦後積み替えられた石垣と築石の大きさ、積み方等が異なるため近世にさかのぼる可能性がある。



図 2 ①調査区現況(南から)

図 3 穴蔵石垣前面の状況(南西から)

(II) 橋台(⑨調査区)

ア 調査の概要

橋台における遺構の残存状況を確認するため調査を行った。橋台中央を走るボックスカルバート部は掘削不可能なため、調査区中央は現状のまま残し、調査区の西端、東端を掘削した。

調査区内の大部分は現天守閣工事による攪乱を受けていたが、攪乱の及んでいない北側(大天守方向)で近世盛土、築石等を確認した。

イ 調査成果

(a)層序

現在の床舗装、碎石、現代の整地土層の直下にシルトブロック混じりの盛土と思われる砂質土層(盛土①～⑤)が確認された(図5)。それぞれ7～8cm程度の厚みをもって堆積し、石垣側から橋台中央へ向かって下降するかたちで堆積する。

碎石直下の一連の盛土①～⑤では現代の遺物が検出されなかったこと、各層とも類似した厚みで堆積し、橋台通路の造成に伴う一連の施工と考えられることから、近世の土層と考える。

(b)検出遺構

橋台石垣

調査区東壁では橋台側面の石垣の下部が確認される。築石の下部は近世盛土中に埋没していることから、近世の石垣と考えている。

石垣前面の捨て石

橋台通路の造成に伴う近世盛土の下層には、粘質土とともに固められた 10 cm 程度の礫が多量に検出された。これらは石垣の前面に密着し固められていることから、近世橋台石垣の前押さへの捨て石の一部と考えている。

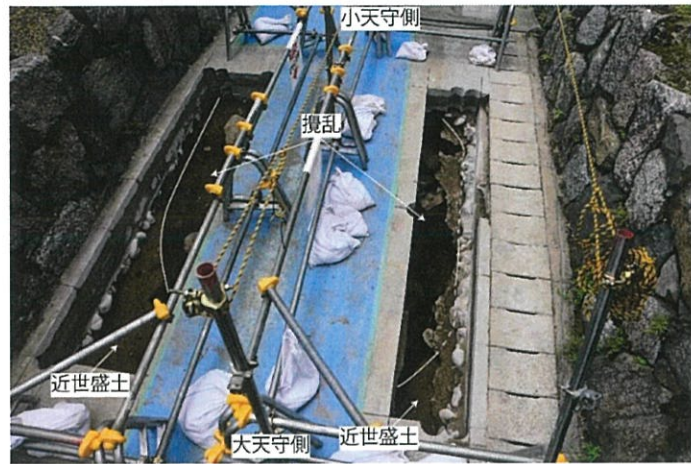


図 4 ⑨調査区現況(北から)

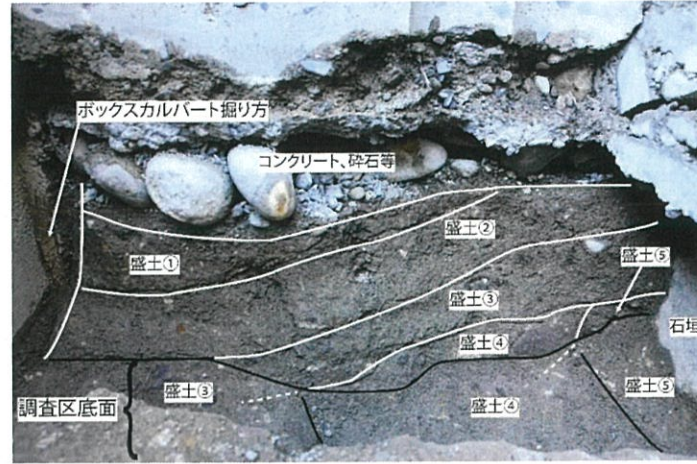


図 5 ⑨調査区北壁層序(南から)



図 6 ⑨調査区東側の石垣前面捨て石(西から)

2 天守台穴蔵石垣背面調査の調査成果について

(1) 調査の概要

天守台穴蔵石垣の今後の修復、整備の方針を検討するため、遺構の残存状況および現存の石垣の安定性の確認を目的とした発掘調査を実施している。調査区は、遺構が残る可能性がある隅角部付近(①、③)と、現天守閣再建時に大きく変更を受けた箇所(②)の計 3 箇所に設定した。

(2) 調査成果

ア ①調査区

(a) 調査の目的、範囲

天守台石垣北東隅角部における遺構の残存状況等を確認するため設定した調査区である。調査区中は礫、砂の土質で大小の石材が多数堆積するため、壁面の崩落を避ける目的で途中に段差をつけて掘削した。

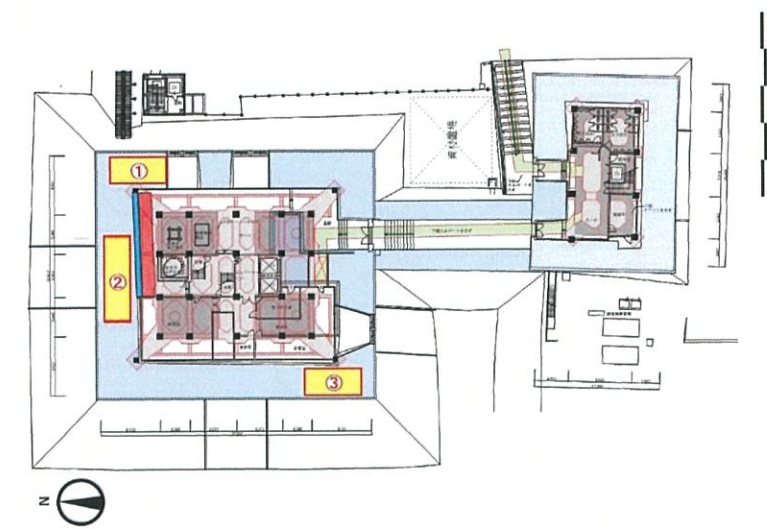


図 7 天守台穴蔵背面調査箇所位

(b) 層序

土層の堆積状況を確認するため、調査区内にサブトレンチを設定し天端面から約 1m 掘削したが、針金、タタキ片等を含む現天守閣再建時の工事土が堆積する状況で、近世の栗石層等は検出されなかった。

(c) 築石の状況

調査区南東隅のレーダー測線上で、現天守閣再建時の工事土を除去したところ築石の石尻を検出した(位置は図 8 のとおり)。控え長は現在確認中である。

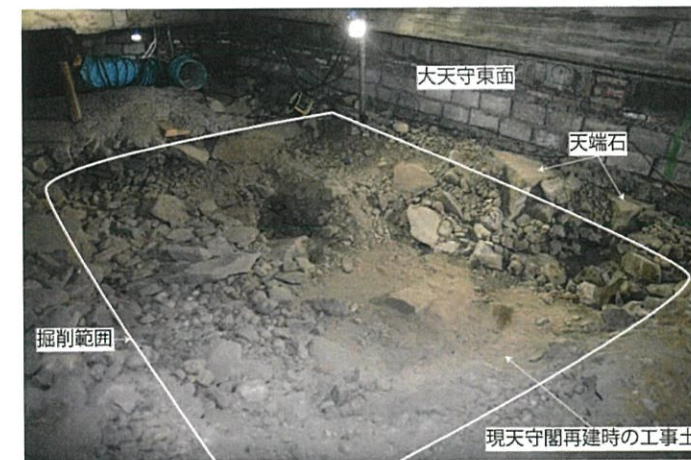


図 8 背面①調査区全景(南西から)



図 9 背面①調査区築石(西から)

イ ②調査区

(a) 調査の目的、範囲

石垣の安定性を検討するため、現天守閣再建時の仮設土留め等の範囲の確認及び遺構の残存状況を確認するために設定した調査区である。

調査区上には現天守閣再建工事に伴う大型の石材が散乱していたため、人力で撤去可能な範囲でトレンチを設定し、安全勾配を意識しつつ掘削を行った。

(b) 層序

土層の堆積状況を確認するため、調査区内にサブトレンチを設定し天端面から約 1m 掘削した。掘削の結果、天端面上に堆積する大型の石材の下には小型の石材が部分的に堆積し、その直下に

は①調査区と同様の現天守閣再建時の工事土が北側へ向けて下降しながら堆積していた。

(c) 築石の状況

築石上面に塗り固められていたモルタルを除去し、付近の砂、石を除去したところ、調査区北西角で築石の石尻を確認した(位置は図 10 のとおり)。控え長は現在確認中である。



図 10 背面②調査区全景(東から)



図 11 背面②調査区土層等堆積状況(東から)



図 12 背面②調査区土築石(南から)

ウ ③調査区

(a) 調査の目的、範囲

天守台石垣南西隅角部における遺構の残存状況等を確認するため設定した調査区である。

調査区中には大小の石材が多数堆積するため、壁面の崩落を避ける目的で途中で段差をつけて掘削した。

(b) 層序

掘削の結果、調査区南西隅には現天守閣再建前の石垣積替工事(昭和 29~31 年度)時に施工されたとみられるタタキ面(当時の施工資料には「混擬土」と記載)が残存していた。タタキ面直下には長さ 20 cm 程度の石材が堆積する。針金等を含むことから昭和 29~31 年度工事に伴う栗石と考えられる。調査区北半ではタタキ面は確認できず、①、②調査区と同様の現天守閣再建時の工事土が確認されたため、再建工事時にタタキ面を除去し、工事土を埋めたものと考えられる。



図 13 背面③調査区全景(北から)



図 14 背面③調査区築石(東から)

(c) 築石の状況

調査区南西隅付近において、築石上面に塗り固められていたモルタルを除去し、付近の砂、石を除去したところ、1か所で築石の石尻を確認した(位置は図 13 の通り)。控え長は確認中である。

3 調査のまとめ

(1) 天守台穴蔵石垣試掘調査

・調査区の拡張により、新たに石列の延長を確認した。石列上の石垣の時期については一部確定できておらず、今後の検討課題である。

(2) 橋台試掘調査

・現代の攪乱の範囲外で近世盛土、橋台石垣下部とその前面の捨て石等を検出し、石垣下部が残存していることを確認した。

(3) 天守台穴蔵石垣背面調査

・①~③調査区では、天端面より約 1 m 下まで天守閣再建時工事土等が続くことを確認した。現天守再建時の仮設土留め、近世栗石層等は検出されなかった。

・各調査区のレーダー測線上で築石の石尻を検出した。今後測量を行い、レーダー測定の成果と比較する。

4 天守台穴蔵石垣①調査区の追加調査について

(1) 現状の課題

大天守穴蔵石垣北面に設定した①調査区では、近世に遡ると考えられる石列を検出したが、その上部に存在する穴蔵石垣の一部についてその時期が確定できてない。調査区東側には積み方から近世に遡る可能性がある石垣が存在するが、その石垣との連続性についても現状では明らかとなっていない。

(2) 追加調査の目的と方法

調査区東側の石垣と石列上にある石垣との連続性を確認するため、調査区を東へ 1.5m 拡張し掘削を行うことで、石垣面の状況を確認する。これにより、石列上の石垣の時期を確定するため

の情報を得る。調査終了後は、石垣際については、石垣補強のため必要に応じて割栗石を叩き込む。

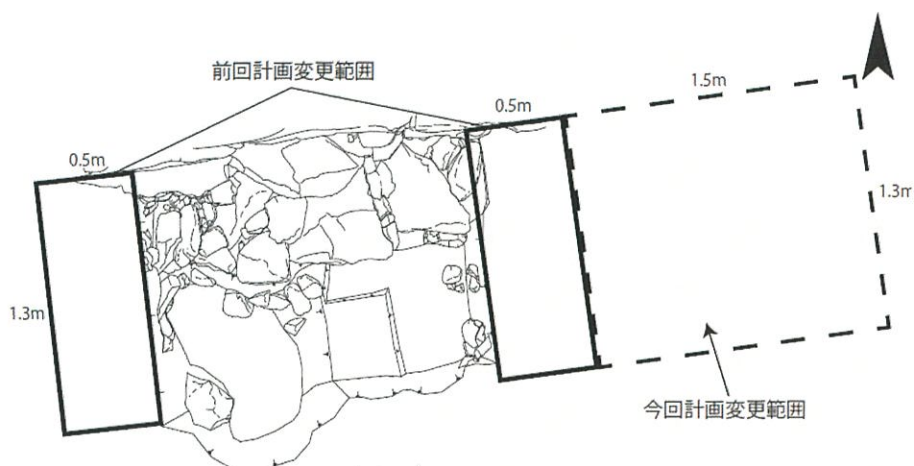


図 15 追加調査予定範囲



図 16 調査区東側の石垣(東から)

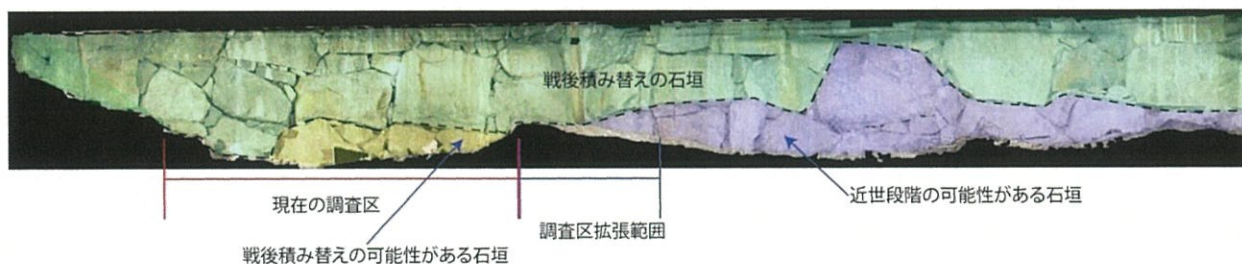


図 17 ①調査区北面石垣の状況

本丸搦手馬出周辺石垣の修復について

名古屋城本丸境門跡周辺発掘調査成果

1. 調査の目的

- ・石垣の修復に伴い計画している本丸搦手馬出の平面修景に先立って、境門の痕跡及び境門跡に現在設置されている石積みと地下遺構の関係を確認すること。
- ・本丸搦手馬出周辺石垣積み直し基本計画で提示した排水計画でメインの排水としている内堀に開口した石樋について、排水が機能しているか確認すること。

2. 調査成果



写真1 調査区全景（東から）



写真2 調査区全景（北から）

2. 調査成果

【基本層序】

- ・現地表面直下に近現代造成土が堆積する。盛土の厚さを調べるために石垣に影響を与えない箇所（写真2赤四角内）で近世盛土の断ち割りを行った。1mほど掘削しても地山に至らなかったため、掘削を中止した。盛土は北東へ傾斜するように造成されている。



写真3 断ち割り坑内堆積状況（南から）

【土中石垣】(写真2 赤線部)



写真4 土中石垣検出状況（北東から）



写真5 土中石垣検出状況（西から）

- ・角石は写真4 赤四角内の石とみられる。暗渠の掘方の上に乗っているため、原位置ではない可能性が高い。
- ・角石の北には築石大石材を含む3石が積まれている。一番下の石材は他の築石と比較すると矢穴が小さいことから、同時期の石材ではないとみられる。積み方も不安定なため、土中石垣構築期よりも後になって入れられたとみられる。
- ・東面石垣は検出した石材が最下段とみられるが、北面石垣の最下段の石材はかなり深く設置されている。現代の花壇状石積みについては、東面では全く別に見えるが、北面では土中石垣に擦り付けて積まれている。

- ・写真5の石垣は石材間に埋まっていた土から検出された遺物が近代以降の陶磁器を含むことから、大部分が現代の花壇状石積み設置時に積み直されたものとみられる。ただし写真5の赤四角内の3石については、面が揃っていないことから、花壇状石積みには先行するものの可能性がある。



写真6 土中石垣東面最南端状況（東から）

- ・写真6 赤線内では、堆積土についてブロック状の高まりがみられた。この部分で花壇状石積みと土中石垣がぶつかることから、土中石垣の築石が抜き取られた痕跡の可能性はある。

【暗渠】

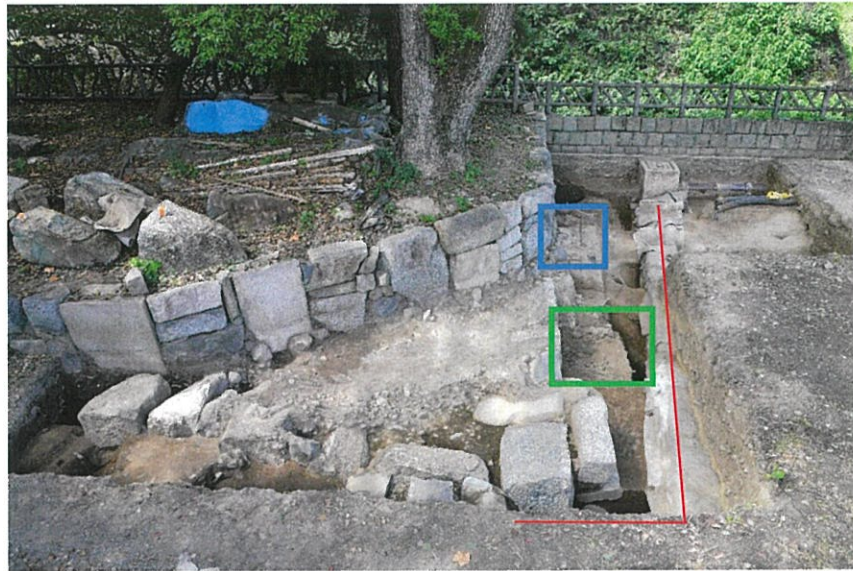


写真7 調査区全景（東から）（赤線部が暗渠）



写真8 雨水枿との接続部（東から）

・既調査で確認されていた内堀に吐出口をもつ暗渠を再検出した。暗渠の集水枿は土中石垣の隅角部から東に2石目の石材を側石として利用しており、土中石垣とは軸が異なっている。また写真8の通り、雨水枿に直接取りついている様子が確認できた。雨水枿から延びる土管は赤矢印の向きに傾斜する。

・暗渠の掘方内から番線を確認したこと、暗渠及び掘方が後述する1号遺構を切っていることから、近現代のものと考えられる。

【1号遺構】（写真7 □内）



写真9 1号遺構検出状況（北から）

・土中石垣北面すぐ北から幅1m×深さ0.8mほどの瓦溜り（1号遺構）を検出した。近代陶磁器を含む固く締まった層が被覆する。

・含まれる瓦は平瓦・丸瓦を主とし、現時点で確認した範囲では棧瓦を含まない。わずかに確認した軒平瓦の文様は17世紀代のものである可能性が高い。

【2号遺構】（写真7 □内）



写真10 2号遺構検出状況（北から）

・花壇状石積みのすぐ北から東西に並ぶ瓦列を検出した。瓦の向きは途中で変わり、枿のような形になることなどから、雨落ちである可能性が考えられる。根より西については、近現代の攪乱により切られていた。

3. 考察



図1 金城温古録 搦手外馬出大体 (□内が今回の調査範囲)

- ・土中石垣については位置的に見て境門跡に関連する石垣である可能性は高い。しかし、原位置をとどめているかについては検討が必要。特に北面に対して東面は最下段の石の標高が高いこともあるので慎重に取り扱う必要がある。
- ・1号遺構については、含まれる遺物がほぼ瓦のみである点や近代遺物を含む層が被覆していることから、構造物を廃絶した際に一括で瓦が廃棄されたものの可能性がある。1号遺構の位置は金城温古録を参照すると、門の柱があった位置に近い。確認できたわずかな軒平瓦の文様が17世紀代にさかのぼることから、門廃絶後に、門にふかれていた瓦を礎石もしくは柱を抜き取った穴に廃棄したものの可能性がある。
- ・2号遺構については、検出された標高がほかで確認されている近世盛土の標高よりも高いなどの疑問点はあるものの、雨落ち状瓦列として整理したい。位置的には金城温古録で「塀」と記述してある場所のすぐ北側で検出されたため、塀の雨落ち溝である可能性が考えられる。

西之丸蔵跡追加調査について（報告）

- ・六番御蔵については、礎石・地覆石、それらの抜き取り痕跡、基礎部分の布掘りの範囲から建物の位置や規模を把握。また、庇についても柱の礎石下の根固め石の位置から庇柱の位置を確認。
- ・一番御蔵は、部分的に検出した礎石の抜き取り痕跡や近代建物周囲をめぐる水路、近世の石組み水路の位置と絵図や文献の情報を総合すると、位置の推定は可能。
- ・二番御蔵、五番御蔵については、蔵跡に関する遺構は未確認。

（1）六番御蔵（3頁：図2）

- ・礎石・地覆石やその抜き取り痕跡、建物基礎の布掘りの跡から、南北20間、東西4間（1間：6尺3寸=191cm）で構成される蔵の規模・位置を確認した（図2-1）。復元される礎石の配置からは、南北4間、東西4間の5つの空間に区分され、それぞれに戸前がつくと推定される。
- ・蔵の母屋の西側（入口側）から約1間西側に円礫（多くは3個で1セット：写真2-1）が南北方向に2～3m間隔で並ぶことが確認された。庇を支える柱の礎石の下部にある根固めの石であると考えられる。礎石自体は残存していないものの根固め石の位置から庇の柱礎石の配置は復元できる。
- ・礎石の間に配置される地覆石は、1間あたり5石～7石配置される。地覆石の抜き取り痕跡から地覆石は蔵を全周していたのではなく、蔵の東側全面と南側の東から2間分のみ配置していたことが判明した。また、基礎の布掘り跡を掘削したことで、礎石を設置した後に、基礎の布掘り埋土を掘り込んで地覆石を設置したことが分かった。
- ・礎石は、母屋縁辺のものは硬質砂岩で平面はほぼ正方形に加工される。母屋内部の礎石のうち、中央部分（東端から2間目／西端から2間目）のものは、大型の花崗岩を使用したものと推定される。それ以外の礎石は、硬質砂岩で不定形（正方形でない）か。地覆石は硬質砂岩で平面二等辺三角形に加工された間知石である。
- ・蔵の西側、南側には、母屋の周囲を巡るように底面にタタキを伴う近代水路が検出された。この近代水路とは別に、蔵の東側には南北方向に走る素掘り溝が確認され、六番御蔵の雨落ち溝と推定される。
- ・蔵の西側の近代水路のさらに西側には、幅75cm～80cmで南北方向に延びる瓦を立てて敷き詰めた遺構が検出された（写真2-2）。この遺構の両側はタタキや瓦の細片を含む土で固めている。瓦と共に部分的にレンガの使用が見られることから近代の遺構であり、表面の瓦や石材の摩耗具合等から当時は地表面に露出していたと推定されるが、遺構の性格については現時点では不明であり類例の検討が必要である。

（2）一番御蔵（4頁：図3）

- ・A区とB区では、母屋の礎石の抜き取り痕跡が確認され、蔵の北端と東端が判明した。その礎石の間隔（柱間）は6尺5寸（197cm）である（図3-1・2）。
- ・A区・B区では、蔵の母屋の周囲を巡る溝および溝を埋めたタタキを確認した。一番御蔵が近代に倉庫として利用された際に建物周りに巡らされた水路と推定される。この水路の範囲は、倉庫として使われる以前の一番御蔵の範囲を反映していると考えられるため、水路の位置を手掛かりにすると南側の端も推測可能である。

・C区では、蔵の西端の礎石位置は確認できなかったが、南北方向に延びる石組水路を検出した。この水路は『金城温古録』に記載されている「水道」と推定されるため（6頁：図6-3）、一番御蔵の西端はこの水道より東に位置すると考えられる。

⇒ 北側と東側で検出した礎石の抜き取り痕跡から建物の北東隅を決め、そこを起点に『金城温古録』に記載された寸法で建物を図上配置すると、南側は近代水路（またはタタキ）、西側は水道の内側に収まる。また、検出した礎石推定位置と柱間（1間：6尺5寸）から、『御本丸御深井丸図』に記載された間数で復元した蔵跡の位置とも一致する。以上の、調査結果と絵図情報から一番御蔵の位置は高い確度で推定可能であると考えられる（図3-4）。

・B区の北側では、建物の戸前に付随すると考えられる断続的に瓦を立てて敷き詰めた遺構が確認された。しかし、その南側で検出した庇の柱の礎石が埋まった後に溝を掘りこんで瓦を並べていることから、戸前が作られた当初のものではなく、後に作られたものである（当初の戸前の雨落ち溝はその下部にある）（写真3-2・3）。

⇒ 戸前は東西約3.5m、南北約2mに復元され、隣の戸前との間隔は4.5mほどになると推定される。また、『金城温古録』には、戸前は六口あったことが記されている。これを図上で復元すると西側に偏ることから、戸前の規模や間隔が一定でなかった可能性がある。

（3）二番御蔵（5頁：図4）

- ・D、E区では、礎石や雨落ち溝等があったと推定される位置に瓦の廃棄坑や現代の攪乱があり、蔵跡に関する情報は得られなかった（図4-1・2）。
- ・F区では、昭和時代と推定されるレンガの基礎を検出したため、部分的に深掘りをして下部の状況を確認したが、蔵跡に関する遺構は認められなかった（図4-3）。

（4）御蔵御門・水道（5頁：図4）

- ・一番御蔵と二番御蔵の間に構えられた御蔵御門については、礎石等確実な遺構は検出してないがC区中央に南北に並ぶ石材を多く含む遺構が確認された。これは、門の東側の門柱・控柱の礎石の抜き取り痕跡の可能性はある（西側は不明）（図4-1）。
- ・C区中央には南北方向に延びる水道（石組水路）を検出（写真4-1・2）。水道の石組は積み直されたり拡張されながら使用されてきたことが分かっている。水道底面の標高から、水は北に向かって流れ、西之丸北側の石垣内の樋から外堀に排出されたと推定される。
- ・水道が通っていたと想定していたJ区には、水路の底面の標高より深いところまで、近代の建物基礎（軽禁錮か）が入っており、水道の位置は確認できなかった（図5-4）。

（5）五番御蔵（6頁：図5）

- ・G区では、近代建物（伝染病檻か）の基礎の地業が確認されたため、一部を深掘りして下部の状況を確認したが、五番御蔵の庇や母屋の礎石、雨落ち溝等蔵跡に関する情報は得られなかった（図5-1）。
- ・H区では、蔵跡廃絶後に施工された道路面を検出したため、一部を深掘りして下部の状況を確認した。近世初頭に遡る土坑を確認したが、蔵跡に関する遺構は認められなかった（図5-2）。

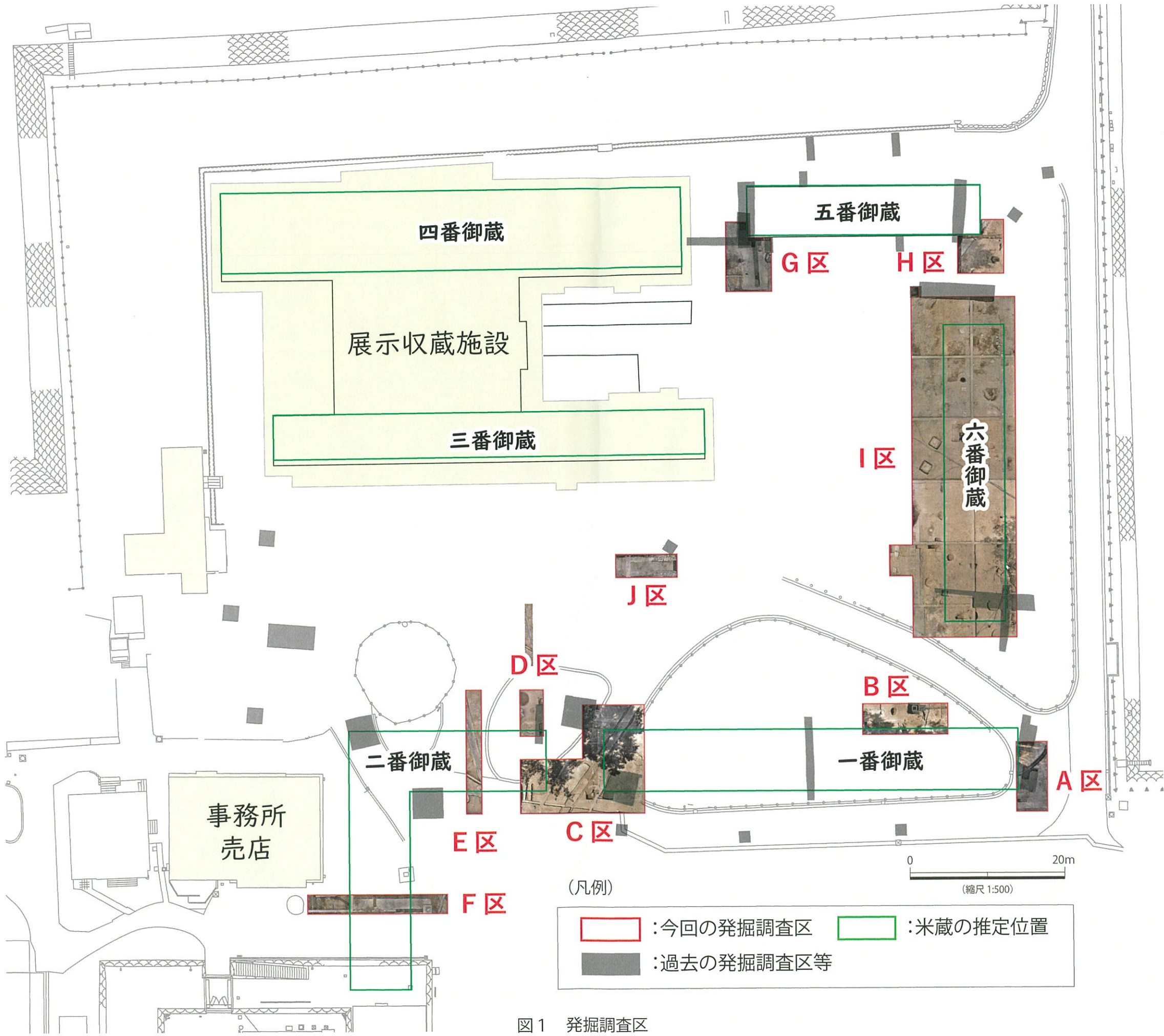


図1 発掘調査区

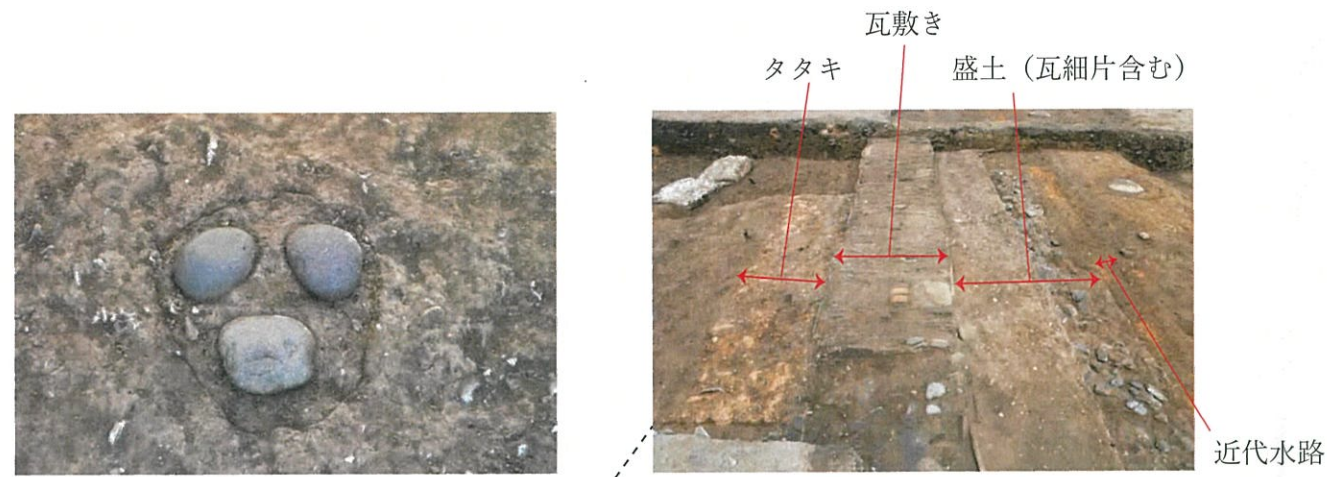


写真2-1 庇の礎石下の根固め石 (南から)

写真2-2 瓦敷き遺構 (南から)

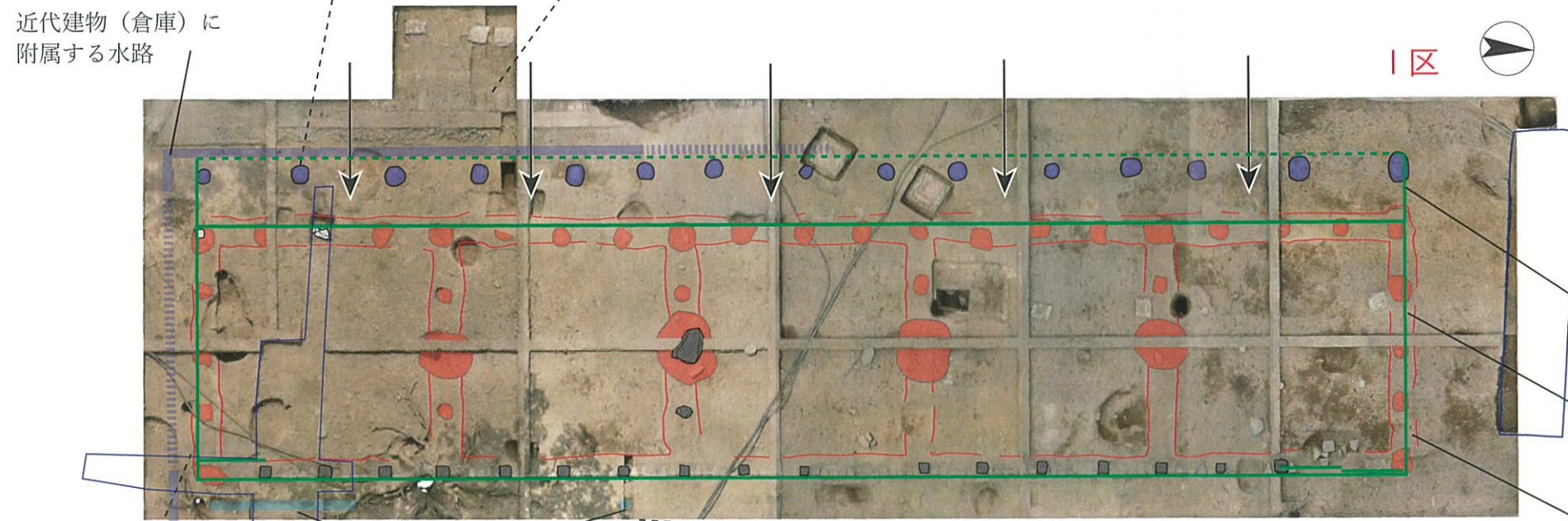
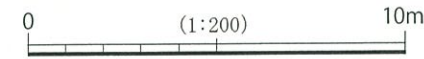


図2-1 六番御蔵の調査区 (I区)



写真2-3 南側の地覆石 (南から)

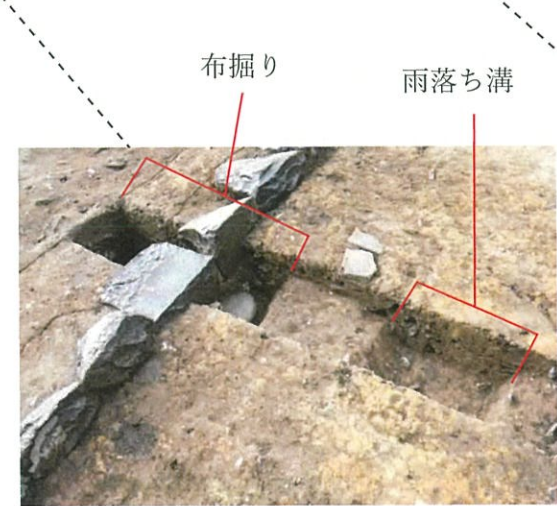


写真2-4 礎石・地覆石の深掘り (南東から)



写真2-5 礎石・地覆石の設置状況 (南西から)

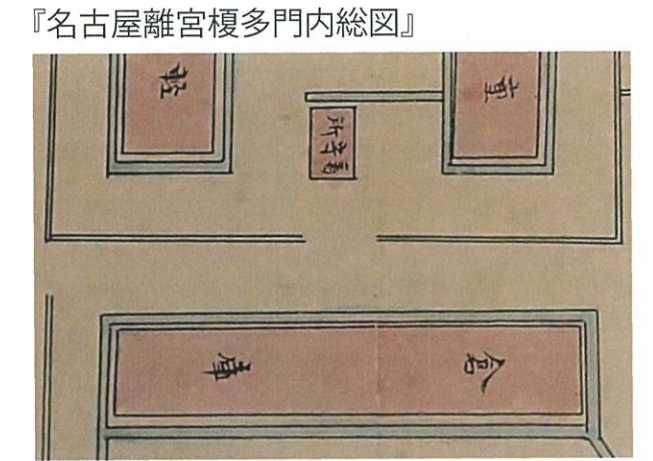
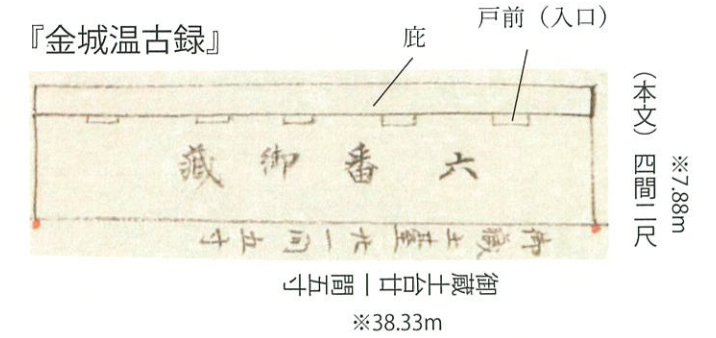


図2-2 絵図記載の六番御蔵

- 庇の推定範囲
 - 緑枠：六番御蔵 (母屋) の範囲
(南北 38.7m × 東西 8.1m)
 - 赤枠：基礎の布掘りの範囲
- | | |
|---|-----------------|
| ■ | 母屋の柱の礎石 |
| ○ | 母屋の柱の礎石抜き取り痕 |
| ● | 庇の柱の礎石掘方 (根固め石) |
| → | 戸前 (入口) の推定位置 |

図2 六番御蔵の調査

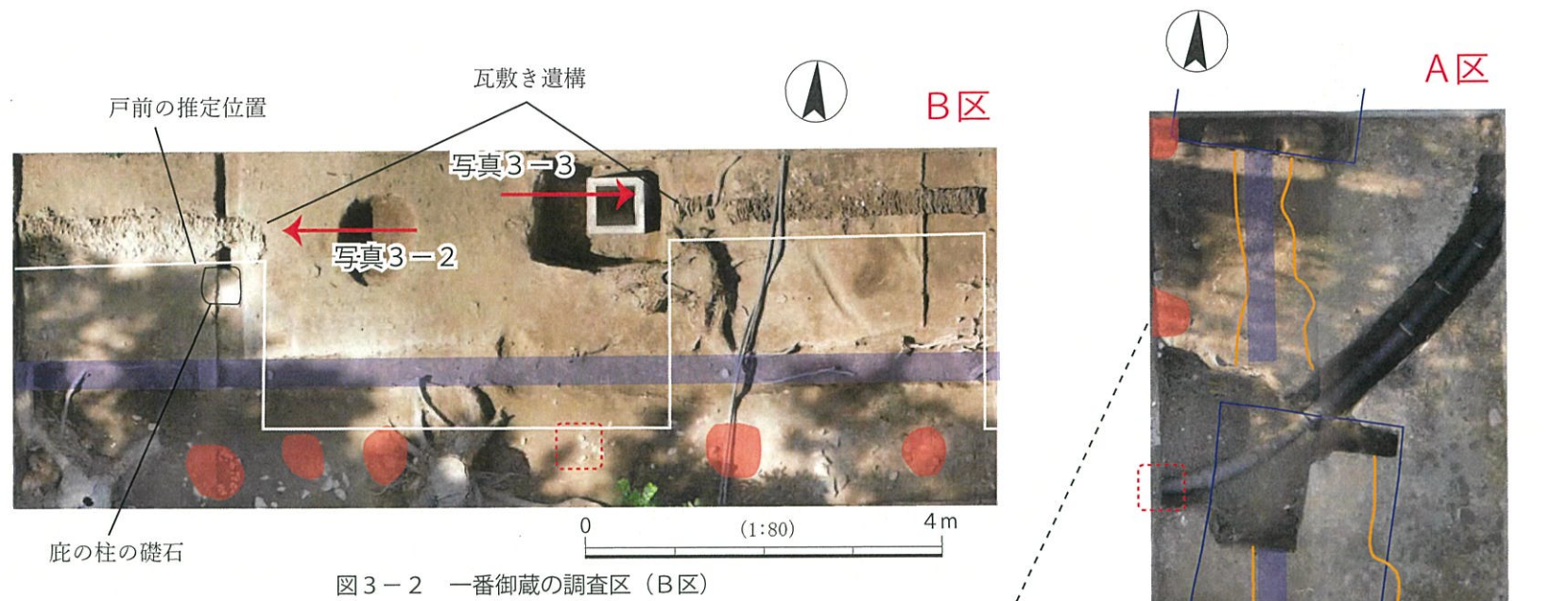


図3-2 一番御蔵の調査区(B区)



写真3-2 B区戸前礎石と瓦敷き遺構(東から)



写真3-1 A区の礎石抜き取り痕跡(タタキ充填)(南から)

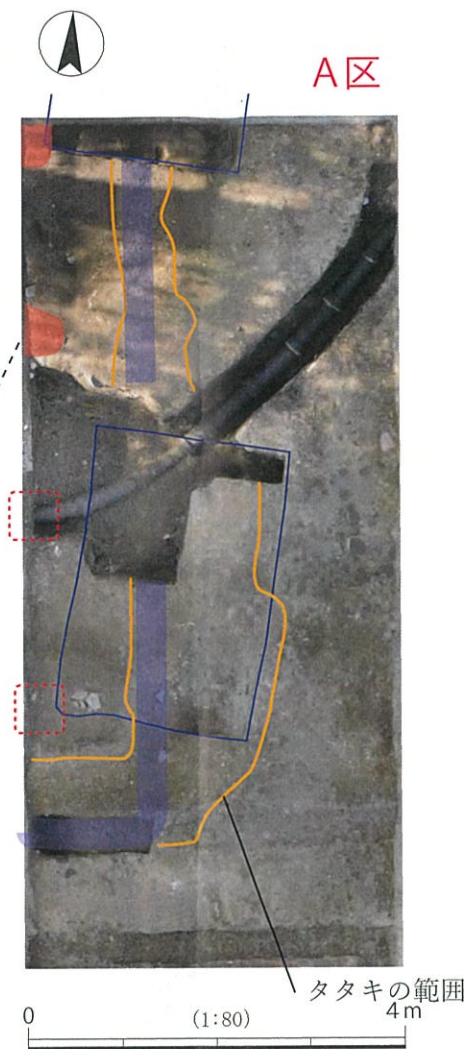
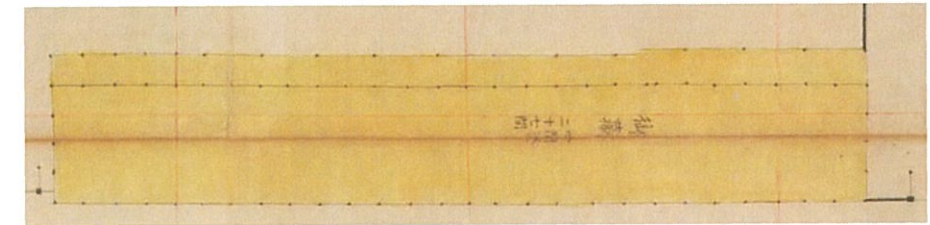


図3-1 一番御蔵の調査区(A区)



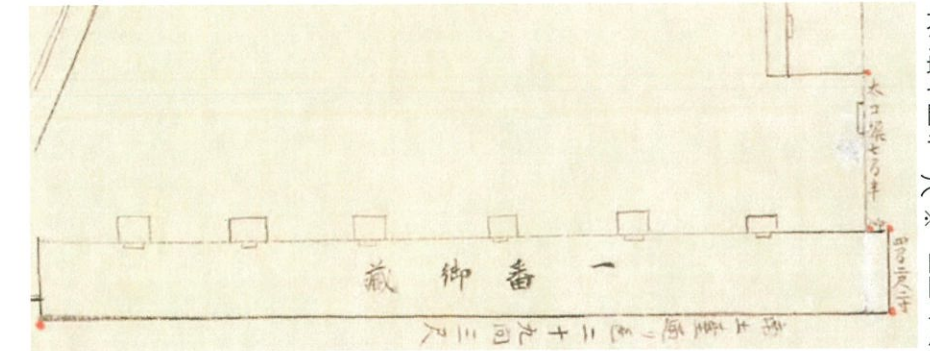
写真3-3 B区戸前の雨落ち溝(西から)

『御本丸御深井丸図』



東西27間、南北4間
※53.14m ※7.87m

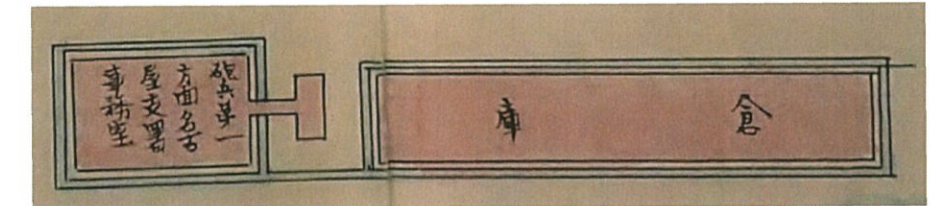
『金城温古録』



太二堀七間半 ※13.65m
凡二 ※1.82m
四間二尺二寸 ※7.94m

砲兵第一方面名古屋支署事務室
※53.63m

『名古屋離宮榎多門内総図』



砲兵第一方面名古屋支署事務室

倉庫

図3-3 絵図記載の一番御蔵

- ・蔵跡の推定範囲を示す緑枠は、北側、東側の礎石抜き取り痕跡を起点に『金城温古録』記載の大きさに配置したもの。
- ・礎石推定位置を示す赤の□は、北側・東側の礎石抜き取り痕跡を起点に『御本丸御深井丸図』に記される柱(礎石)を1間=6尺5寸で配置したもの。
- ・戸前の推定位置を示す橙枠は、B区で検出した戸前の位置を2間間隔で配置したもの。

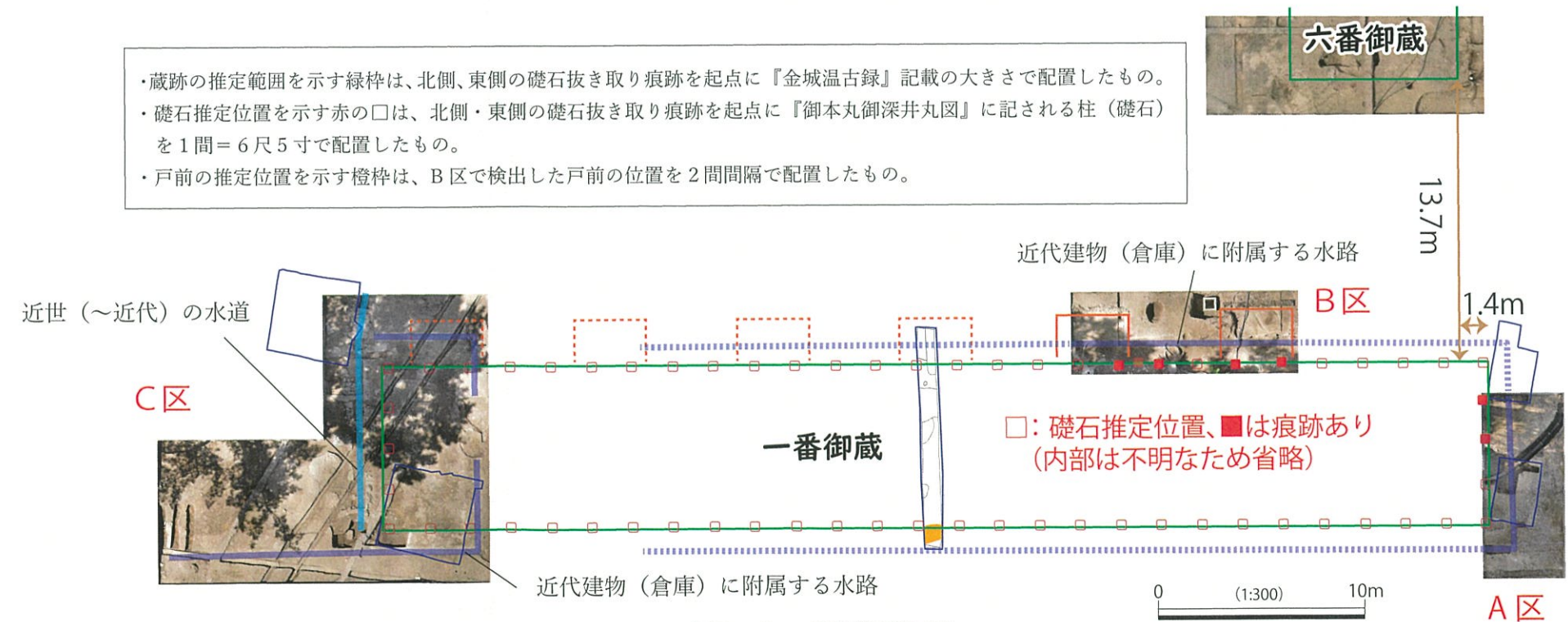
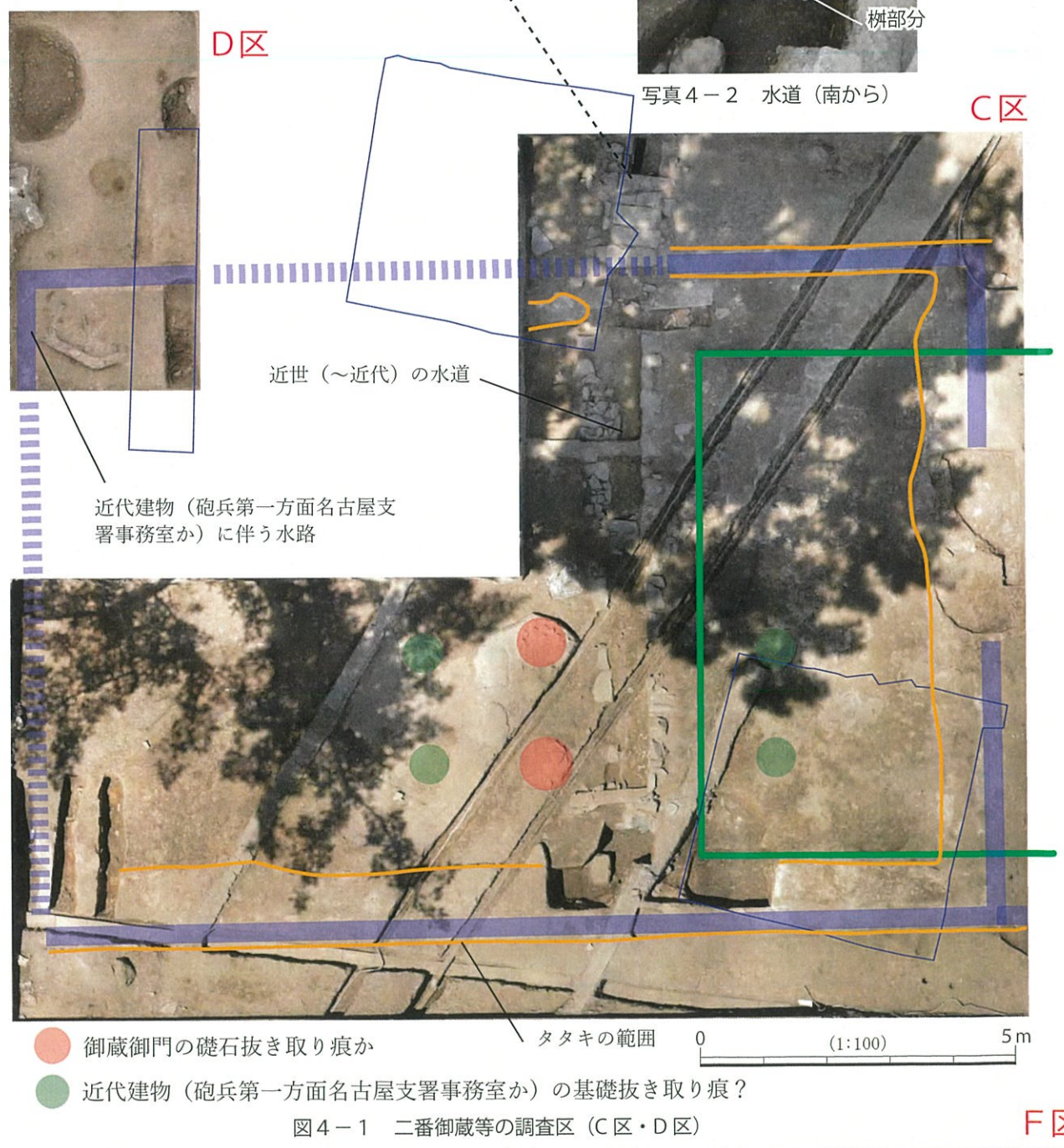


図3-4 一番御蔵の復元図

図3 一番御蔵周辺の調査



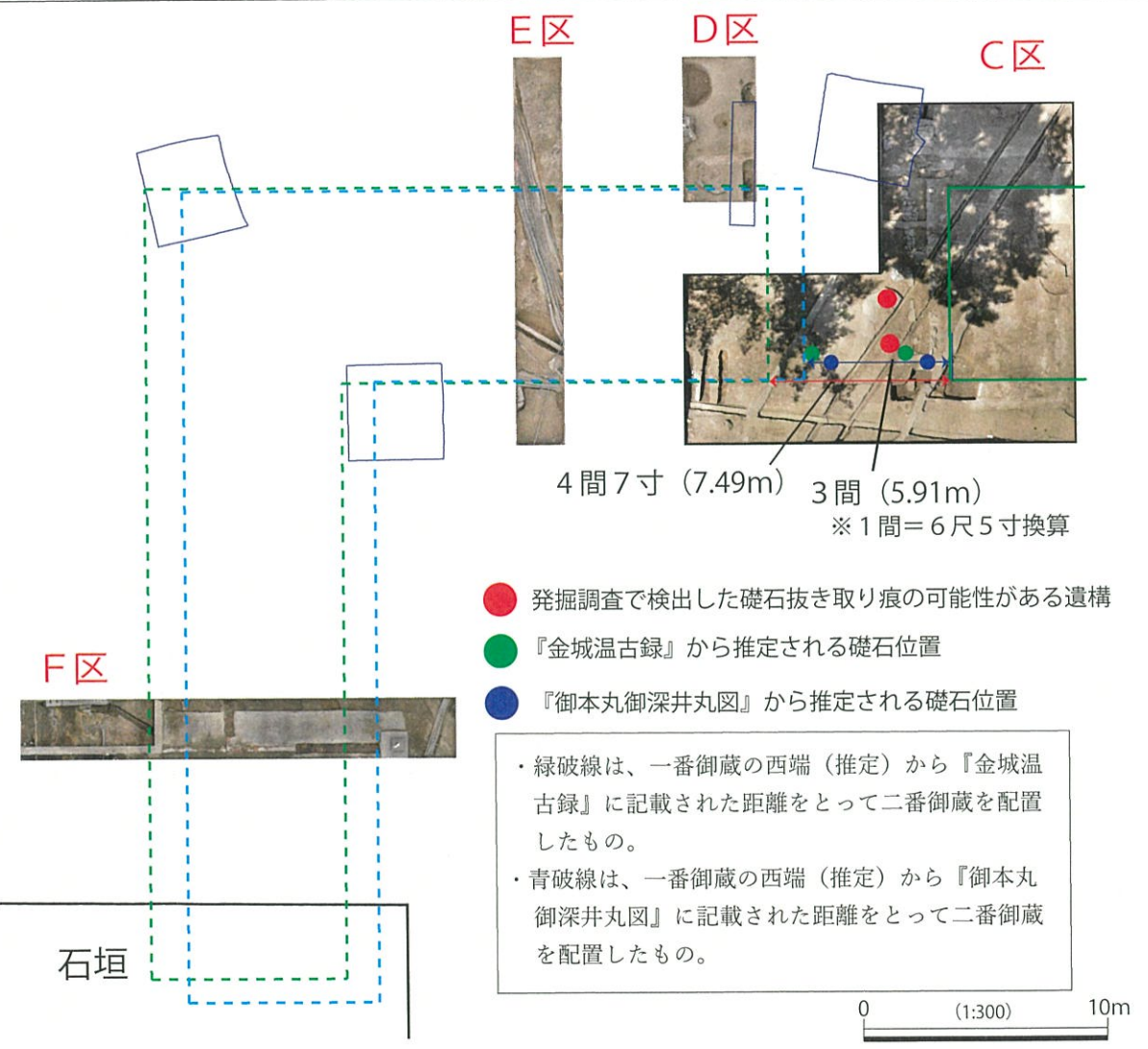
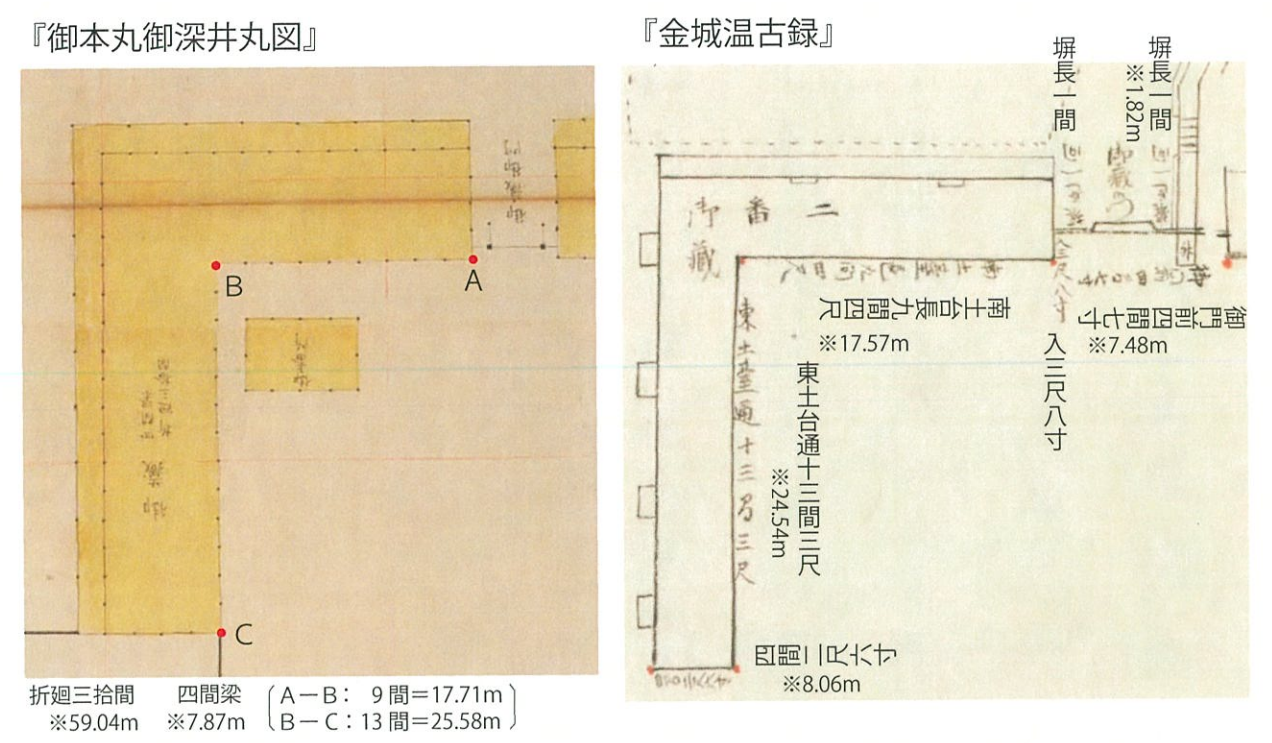
E区



図4-2 二番御蔵の調査区（E区）

図4-3 二番御蔵の調査区（F区）

図4 二番御蔵周辺の調査



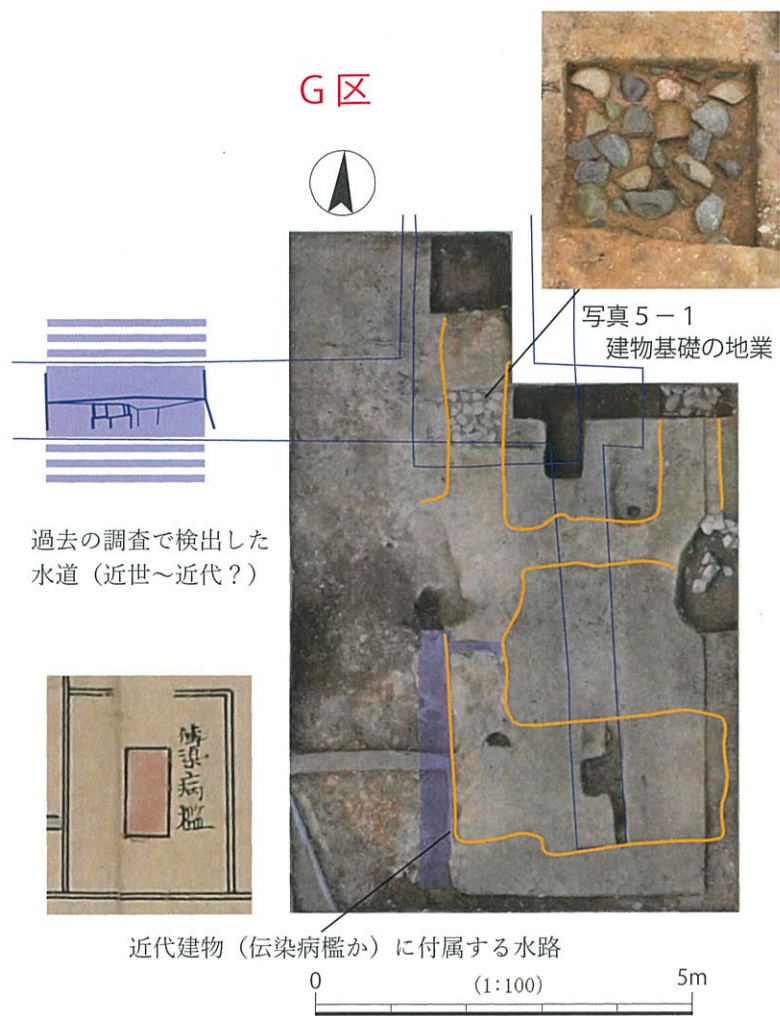


図5-1 五番御蔵の調査区（G区）

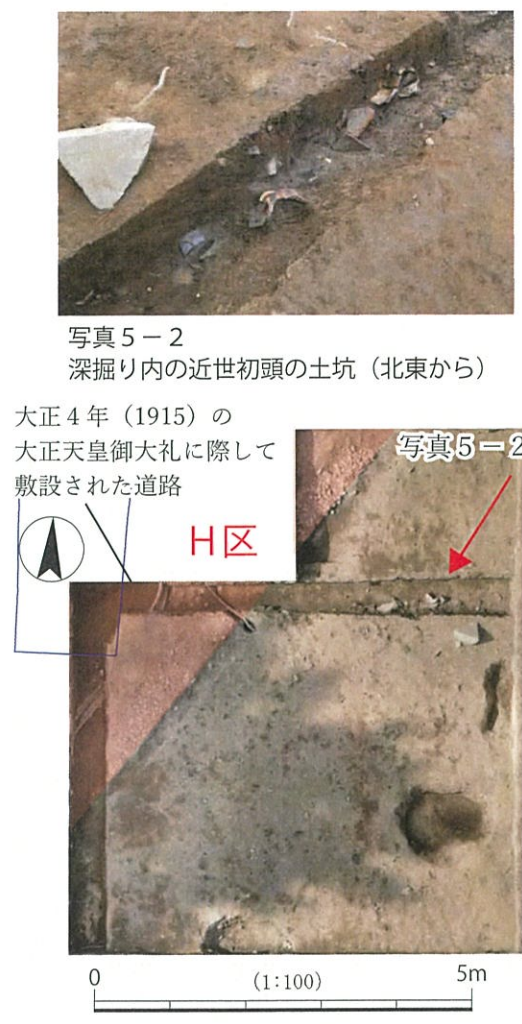
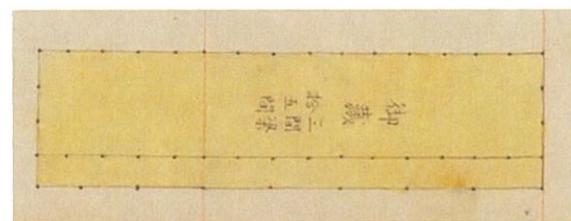


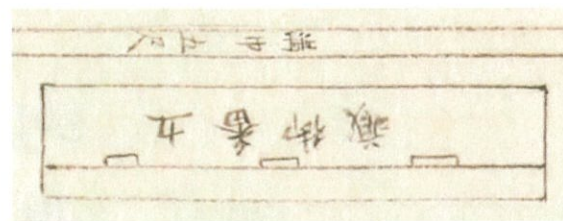
図5-2 五番御蔵の調査区（H区）

『御本丸御深井丸図』



拾五間 三間梁
※29.52m ※5.9m

『金城温古録』



（本文）東西長十六間二尺五寸、巾三間二尺四寸
※29.84m ※6.18m

図5-3 絵図記載の五番御蔵

J区 近代建物（軽禁鋼か）に伴う水路

近代建物（軽禁鋼か）の基礎と根固め石

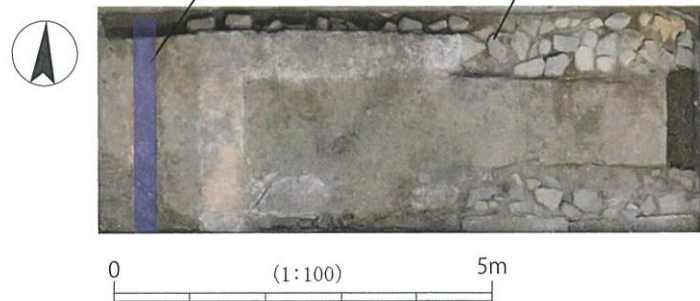


図5-4 水道の調査区（J区）

『名古屋離宮榎多門内総図』

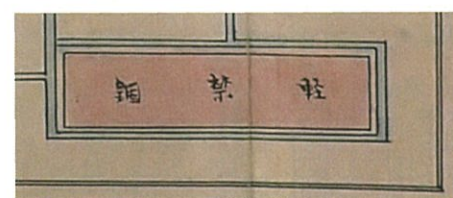


図5-5 絵図記載の近代建物

図5 五番御蔵周辺の調査

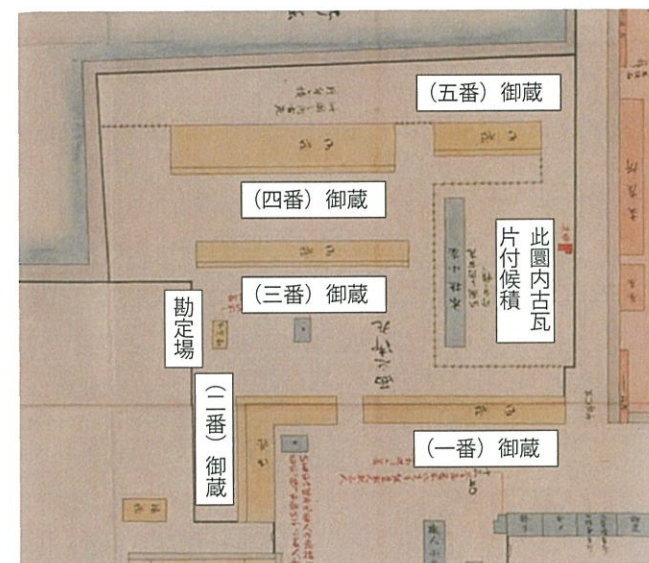


図6-1 御深井丸内諸御役人詰所御作事本所諸番所建方指図（名古屋城蔵）に加筆※宝暦年間（1751-1764）の写し

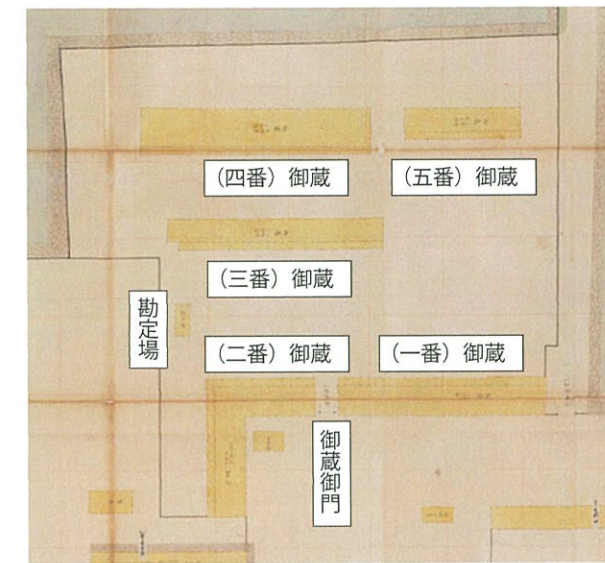


図6-2 御本丸御深井丸図（名古屋市博物館蔵）に加筆※天保5年（1834）以前

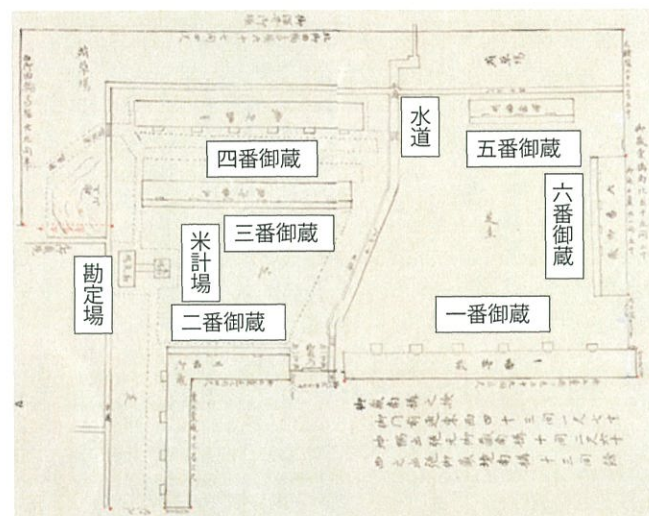


図6-3 金城温古録（名古屋市蓬左文庫蔵）に加筆※万延元年（1860）献上

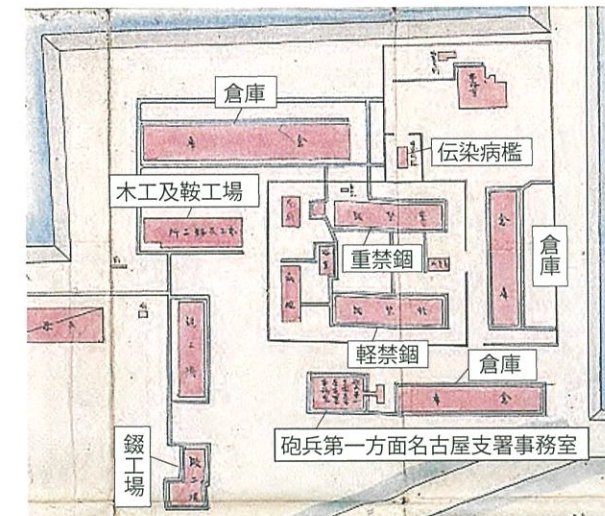


図6-4 名古屋離宮榎多門内総図（宮内庁宮内公文書館蔵）に加筆 ※明治33年（1900）

図6 名古屋城西之丸の絵図